2019/8/18　中原キリスト教会

　　　　　　　　　　　　　　**「ヨセフの生涯」**

創世記　50:15-22

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　今日は創世記の最後に記されているヨセフの物語をみます。創世記は天地創造に始まりますが、そのあとは所謂族長の物語になります。最初は勿論アブラハム、次いでイサク、そしてイスラエル民族の祖先となるヤコブの物語です。ヤコブには12人の息子がいますが、ヤコブの正式な跡継ぎとなったのは下から二番目のヨセフでした。そのヨセフの生涯が創世記の最後を飾ることになります。実は、12人の息子の内、最終的にイスラエル信仰の担い手となったのはユダ族でした。この族長ユダの話がヨセフの話の間に挟まっています。38章です。今日はそこはとばして、ヨセフの生涯にのみ焦点をあててお話しします。37勝から50章までです。お読みいただいたのはその最後のところです。ヨセフの生涯全体を解らなければ、最後のところの意味がわかりませんので、37章の最初から要点だけを見ていきます。

　まずこの時代背景を簡単におはなしします。このイスラエルの地はナイル川河口に成立したエジプト文明とチグリス川とユーフラテス川にはさまれた地域に成立したメソポタミア文明の間にある小さな地域です。エジプトではBC30cから王朝が成立し、その盛衰が繰り返されます。他方、メソポタミアではBC30cにシュメール王朝と称せられる王朝が成立し、その後はいろいろな王朝が生まれ、消えていきます。BC20cにはウル第三王朝が成立します。創世記の最初の族長アブラハムがメソポタミアをでてカナンの地に向かうのはこのウル第三王朝の頃と推測されています。エジプトは中王国時代と考えられます。その後、エジプトは内部対立の時期を迎え戦乱に明け暮れることになります。この時期を第二中間期と称しています。エジプト東方からのセム族の流れと推測されるヒクソクがナイル川河口付近を支配します。従来のエジプト王朝はナイル川を少々上流に上がったテーベで存続を図っていました。メソポタミアの方はウル第三王朝の後、暫くして古バビロニア帝国が成立します。これはハムラビ法典で有名な王国です。ヨセフ物語の時代はエジプトはヒクソス支配の中間期終期、メソポタミアは古バビロニアの終期と推測されます。このあと、エジプトではエジプト人の支配が回復し新王国時代となります。あの巨大ピラミッドが建設された時代です。聖書での出エジプトの出来事はこの新王国時代BC1250年頃と推測されています。ヨセフ物語の時代はBC1500年頃ですから、数百年の差があります。

　では聖書におけるヨセフの生涯に入ります。なお「ヨセフ」の名前は「主がもうひとりの子をわたしにくわえてくださるように」といわれた「加える」（ya:saf）に由来します。ちなみにヨセフはアラビア語では「ユーセフ」ですがイスラム圏にはこの名前の男性が多数います。中近東の話の時には注意しているとよいでしょう。コーランでもヨセフは偉大な預言者なのです。ヤコブには12人の息子ができますが、妻レアの子が6人、妻ラケルの子は2人、レアの召使ジルバの子が2名、ラケルの召使ビルハの子が2名の12人です。ヨセフは妻ラケルの子で、兄弟12人中下から2番目の生まれです。一番下はヨセフと同じ母から生まれたベニヤミンです。長男はレアの子どもルベンです。イスラエルで最有力な部族となったユダもルベンと同じ母親で年齢順では4番目です。37章の最初に「これはヤコブの歴史である」と言われていますが内容はほとんどがヨセフの話です。38章にヤコブの子ユダ一族の話がありますし、ヨセフの話をするに際しても父親ヤコブの権威の下でヨセフが行動している様が記されているのでヨセフの話がほとんどを占めていても、これは全体としてヤコブ即ちイスラエル族の歴史なのだ、ということを強調したかったからだと思います。

ヨセフが17歳の時彼は夢をみます。畑の束の内、ヨセフの束以外の束がヨセフの束にお辞儀をしたという夢です。だまっていれば良いのにヨセフはこれを兄弟に言いふらします。また太陽と月と11の星がヨセフを伏し拝んでいるという夢を見てこれを父や兄に話します。皆憤慨します。兄たちは従来からヨセフが生意気なのを気にしていましたが、この出来事でいわば切れて、ヨセフへの仕返しの時を狙うようになります。あるとき、兄たちがシェケムで羊の群れを飼うために出かけます。そして父がヨセフに兄さんたちに使いに行ってほしい、と言います。シェケムはカナンの地でも北の方であり、かなりの距離があります。ヨセフはシェケムへの途上でひとりの人に会って兄さん達のことをきいたところドタンというシェケムより更に北に行ったらしいことがわかります。兄たちの方は遠くからヨセフが来ることを知り、積年のうらみを晴らそうと相談します。どこかの穴に放り込んでしまい、父には悪い獣が食い殺した、とでも言い訳しよう、と相談します。そこで長男ルベンは殺すのは良くない、穴に投げ込むだけにしたらよい、と言います。あとから救い出してやろうと思っていたと記されています。兄たちはヨセフの長服をはぎ取って穴に放り込みました。そして食事をしているとイシュマエル人の隊商がキルアデからエジプトへ下って行くところでした。イシュマエル人というのはエドム人のことで死海の南側の住人です。アブラハムの妻サラの召使いハガルがアブラハムによって生んだ子供イシュマエルの子孫です。イスラム教の経典コーランによれば彼らアラビア人はこのイシュマエルの子孫ということになっています。隊商をくんで商業に従事していたようです。ここで兄の一人ユダがヨセフを殺さず売り払おう、と言い出します。そして通りがかったミデアン人即ちアラビア人に銀二十枚で売ります。ミデヤン人はイシュマエル人の一部と考えられていたのだと思われます。あとになってルベンがヨセフを助けようとしたときにはもうあとの祭りでヨセフは隊商に連れて行かれたあとでした。そして雄やぎの血にヨセフの長服をつけ、家に帰って父に見せました。父ヤコブは獣に殺されたと思い泣き悲しみました。あのヨセフを買ったミデアン人はエジプトでパロの侍従長ポティファルにヨセフを売りました。ここまでが37章の物語です。

ここで興味深いことが2点あります。まず一つはイシュマエル人の隊商がらくだで運んでいたのは「樹こうと乳香と没薬」とされています。新約において主イエスの御降誕の時当方の三博士が来たとされていますが彼らが持ってきたのが黄金、乳香、没薬でした。樹こう、と黄金が入れ替わってはいますが口調は似ています。ヘブル語では樹こう、は「neko:t」、黄金は「za:ha:b」です。東方の三博士はバビロンの方からの人たちと推測されていますがアラビア商人たちがメソポタミアとエジプトを繋ぐ商人たちであったことをあわせ考えると興味深いものがあります。ちなみに新改訳で「樹こう」と訳されている「neko:t」は口語訳では「香料」、新共同訳、新協会訳、フランシスコ会訳では「樹脂」、バルバロ訳では「ドラガントガム」と訳されています。聖書植物事典では「トラガント」という名前で出ており、幹から芳香性ゴム質の粘液が出てきてこれを香料としていたようです。また、ヨセフが銀二十枚で売られた、とされていますが、新約聖書でイスカリオテのユダが主イエスを売った時が銀貨三十枚です。マタイ26:15です。おそらく、マタイ福音書において、祭司長たちはヨセフが銀二十枚で売られていた故事があるのを知っていて、主イエスにはplus-アルファで買うようにしたのではないでしょうか。これは主イエスが売られるということはユダヤ人にとってみればヨセフがミデヤン商人に売られたことと心の中で繋がっていた、ということを意味します。

38章はユダの話ですので、39章に行きます。ユダのところでは所謂ラビラト婚の話が出てきます。これは兄が子供なしで死んだら弟が兄嫁と結婚することが義務付けられる、という人類学上興味ある話がでてきますが今日は割愛します。39章ではヨセフはパロの廷臣で侍従長のポティファルに買い取られ、よく仕えたようで、信頼され、全財産を管理する立場になります。ヨセフは体格も良く美男子であった、と記されています。ところがここで大事件が起こります。ポティファルの妻が言い寄って来たというのです。ヨセフはこれを拒否します。すると、その妻はヨセフの上着を皆に示し、ヨセフが自分をもてあそぼうとした、と言い出します。主人のポティファルは怒って、王の囚人が監禁されている監獄にヨセフを入れてしまいます。監獄の長は事情を知っていたようで、ヨセフには自由を与え、厚遇しました。39:23で「主がかれとともにおられ、彼が何をしても、主がそれを成功させてくださったからである」と書かれています。この表現はこの章の最初39:2で「主がヨセフとともにおられたので、彼は幸運な人となり、そのエジプト人の主人の家にいた。」という表現と同趣旨であり、この二つの文章で39章が挟まれている、といえます。

この章で気になるのはポティファルの妻が家の者どもに「ご覧。主人は私たちをもてあそぶためにヘブル人を私たちのところに連れ込んだのです」といって居ることです。彼女たちエジプトの一般の人々はヘブル人というのはこのような不埒なことをする人々なのだ、と思われていた、ということです。「ヘブル」の語源はアッカード語の「ハビル」にあるといわれており、この「ハビル」はウル第三王朝時代に「略奪者」として登場し、その後も、農業労働者、外国人傭兵、略奪者、奴隷、囚人として記され、決して良いイメージの人々ではありません。エジプトではヘブル人というのは最下層を形成していた人々の様です。BC14cのエジプトの文書アマルナ文書に「ハビル」が出て来るとのことですが、これがヘブル人のことかどうかは確認されておりません。もし、ヘブル人はエジプト社会でも最下層の人間集団だったとすれば、出エジプトに関する記述がエジプトの歴史書に全くでてこない、というのもうなづけます。エジプトの方から見ればけがわらしい人々で歴史書に記載するに値しない人々であったのだろう、と思われます。

ポティファルの妻の事件で牢獄に入ることになったヨセフは40章で別の出来事に遭遇します。エジプト王の献酌官と調理官が何らかの罪状でヨセフと同じ監獄に入ってきました。彼らは監獄で夢を見ます。まず献酌官の夢は一本のぶどうの木に三本のつるがあり、葡萄が実り、その葡萄を絞って杯に入れパロの手に捧げました、という夢でした。ヨセフは解き明かして、三日のうちに釈放され、パロは以前の地位を回復してくれる、という意味だ、というのです。他方、調理官の夢は頭の上に枝編もの籠が三つあり、一番上の籠にはパロ用の食べ物が入っていたが、鳥がかごから食べてしまったと言うものでした。ヨセフの説き明かしは三日のうちにパロからの呼び出しがあり、あなたを木につるし鳥があなたを食べてしまう、というのです。そして、この二人についてはその通りになりました。ヨセフは献酌官に、もし、うまく行ったら、私を思い出して下さい、と言っておいたのでしたが、この献酌官はヨセフのことを忘れていました。

41章に入ると今度はパロの夢の話です。その夢は、ナイルから肉付きの良い七頭の雌牛が上がって来て草を食んでいた。そのあとに今度は醜い痩せ細った七頭の雌牛がその側に立った。そして醜い痩せ細った雌牛がよく肥えた雌牛を食い尽くしてしまった、という夢です。それからまた眠ると、今度の夢は肥えた良い七つの穂が、一本の茎に出てきて、すぐそのあとから東風に焼けた、しなびた七つの穂がでてきました。そしてしなびた穂が、あの肥えて豊かな七つの穂を飲み込んでしまいました。このような二つの夢を見たパロは心が騒ぐので国中の呪法師と知恵ある者に夢解きを求めました。しかしだれも解き明かしができません。ここで、先の献酌官がヨセフのことを思い出します。パロはヨセフを監獄から呼び出し、夢解きを求める。そして七頭の雌牛の話と七つの穂の話をします。ヨセフはこれはエジプトに7年豊作が続き、次に7年間のききんが訪れる、というのです。したがってすぐ、知恵ある人をエジプトの統治者とし、豊作の7年間の間にそのあとの備えをすべきだ、と勧めました。するとパロは「神の霊が宿っている知恵のある人」としてヨセフを統治者にしました。そのしるしとして自分の指輪をヨセフの手にはめ、亜麻布の衣服を着せ、首に金の首飾りを掛けました。そして王の第二の車にのせた、と記されています。「第二の車」とは王の代理人の地位を意味する様です。また高い地位の祭司の娘アセナテを妻としました。アセナテは二人の子供を産み、マナセとエフライムと名付けられました。そして豊作の7年に続いて飢饉が訪れます。「ききんは世界に及んだ」とあります。「ヨセフはすべての穀物倉をあけて、エジプトに売った」とありますが蓄積した穀物倉からエジプト人に売った、ということでしょう。

豊作時の備えの時にパロが「ヨセフの言うとおりにせよ」と布告しますが、ヨハネ福音書2:5でマリアがカナの結婚式の時、手伝いの人たちに「あのかたが言われることを、何でもしてあげてください」と同一の意味を見て、ヨハネを主イエスの予型的に見る解釈があります。これは表見上似た言葉が発せられている、ということより、神の恵みの導きが、ヨセフ、そして主イエスに示されている、と理解すべきでしょう。形式的類似性をもって「予型」とみなす解釈は不適当な読み込みに通じます。もっと奥の思想的流れを見るべきです。

マナセと言う名は「神が私のすべての労苦と私の全家を忘れさせた」から、と言われていますが、「na:sha:（忘れる）」の派生語です。エフライムの方は「神が私の苦しみの地で私を実り多い者とされたから」とされていますが、この言葉は「pa:ra:（実る）」の派生語です。

さてこの全世界的ききんにあってカナンのヤコブ一族はどうしたでしょうか。ヤコブは子供たちに、エジプトに食料を買い付けに行くよう言います。ヤコブは末のベニヤミンだけを残させました。彼にわざわいが降りかかるといけないから、と書かれていますが明らかに末っ子に対する偏愛です。ヤコブの場合、エサウとの長子権争いにおいて母親リベカの偏愛によってそれを得るのですが、どうも彼の生涯にはこの親の特定の子に対する偏愛が絡んでくる話が多いように思われます。いずれにしろ、十人の兄弟はエジプトに生きました。エジプトの統治者であったヨセフに食料を売ってくれるように頼みます。ヨセフはすぐ彼らが自分の兄弟だとわかったが兄弟の方はこの対している人物がヨセフであるとは思いもよらなかったと書かれています。ヨセフの方は兄たちに対し、「エジプトへのスパイだろう」と言って脅迫的言辞を弄します。そして、兄たちを試すと称し、誰かが代表して末の弟のベニヤミンを連れてこい、と言い放ちます。

結局ヨセフは一人をエジプトの監禁所においてあとの者でベニヤミンを連れてくるように命じます。そして穀物は持って行ってよい、とします。兄たちは次男にあたるシメオンを残すことにし、縛りました。他方ヨセフは穀物を各人の袋に満たしたのみならず、兄たちが穀物の代金として出した銀をめいめいの袋に返し、道中の食糧も与えました。宿泊所でこれを知った兄たちは、互いに「神は、私たちにいったいなんということをなさったのだろう」と言い合いました。この表現はアブラハムがペリシテの王アビメレクに妻を妹と偽った時に、アビメレクがアブラハムを責めて言った言葉「あなたは、何ということをしてくれたのか」に通じています。両者とも「こんなことがあってはならない」という意味です。そしてカナンの地についてヤコブにエジプトでのことをすべて話します。これを聞いたヤコブは「ヨセフを失った。シメオンを失った。今度はベニヤミンも失おうとしている」と嘆き悲しみます。長男のルベンは「ベニヤミンを任せてほしい。うまく行かなければ、自分の二人の子を殺しても構わない、とまで言います。しかし、ヤコブは承知しません。途中で災いがあって首尾よく行かなければ、それは最大の親不孝を犯す者だ、と言います。言い方は42:38で「あなたがたは、このしらが頭の私を、悲しみながらよみに下らせることになるのだ。」 と言っています。この表現はダビデが後継者ソロモンに対し、反乱者ヨアブを安らかに死を迎えさせてはならない、と言う時に使われています。第一列王記2:6で「だから、あなたは自分の知恵に従って行動しなさい。彼のしらが頭を安らかによみに下らせてはならない。」と言っています。ここでもヨセフとベニヤミンに対するヤコブの偏愛が示されています。あたかもこの二人以外の子どもはどうでもよいかの如し、です。

旧約聖書には他にもありますが、親の特定の子に対する偏愛がでてきますが、私には明らかに公平性を欠いた扱いに見えます。本当に神様の意志なのでしょうか、それとも親の罪の一つと考えるべきなのでしょうか。旧新約聖書には一貫して「弱き者」に対する神の偏愛が見られる、と思いますが、これは「神の力」が目に見えて現れる場であるからだ、と解釈できます。神の栄光が現れるのは「弱き者」のところでであって、「強き者」のところではないからです。アブラハムのイサクへの偏愛、イサク、及びその妻リベカのヤコブへの偏愛、ヤコブのヨセフ、ベニヤミンへの偏愛は同じようなものとは考えられません。むしろ彼らの罪の一つの現れ、と言って良いと思います。このような罪の現れと言って良い事柄を通して、底流に流れる神の選びの摂理を見るべきなのでしょう。神学的難問です。この世の歴史には一面では罪の現れとしか見えないことの底流には神の摂理の具体化というべきことが存在する、ということだろう、と思います。それが神の歴史を導く方法なのだろう、と思います。神の義に全く反している、と見える現象の背後で、神の摂理が具体化する時が醸成されている、といえることがあるのです。旧約の人々はこれを「神の試み」とか「神の訓練」とか「神の警告」というような言い方で説明しようとしてきました。この世界に起きるすべての事柄は神がその発生を許容している、という意味ではすべて神の摂理に添ったものです。悪が蔓延していることも神の摂理です。神と悪魔が戦っているのではありません。悪魔の自由を何らかの理由があってしばらくの間、神が許容しているのです。その理由は私たちが推測可能な時もないわけではありませんが、多くの場合納得的説明が不可能です。それはやむをえません。私たちはそのなかでわめきながら、文句をいいながら、自己矛盾を抱えながら、時には呪いながら、唯一、主なる神の救いの約束に希望を置くのです。

ヨセフの話に戻りますと、カナンの地での飢饉は大変ひどかったので、ヤコブもベニヤミンを連れて行くのは許さない、と言ってばかりはいられなくなり、息子たちにエジプトへ行って食料調達してくるようにまた言います。息子たちのまとめ役的なユダはベニヤミンを連れて行くのは絶対条件だ、と主張します。そして「私がベニヤミンの保証人になります。もし連れて帰ることが出来なければ、私は一生ヤコブに対して罪ある者となります」と言います。「罪ある者」となるとは旧約では「滅ぶ」ということです。旧約の世界で「父」は神と同列にある者とされるべき、との考え方がありますから、父ヤコブに対し「罪ある者」とされるのは神に対し「罪ある者」とされるのと同じなのです。ユダのこの時の態度は自己犠牲です。自らを罪ある者とし、それにより、皆の救いを得ようとする態度です。ヤコブも覚悟を決め「私も、失う時には失うのだ」といいつつ、以前の代金も返し、その他お土産をもって行くように指示します。今回は、「乳香、蜜、樹こう、没薬、くるみ、アーモンド」です。種類も増えています。「失う時には失うのだ」というのは神の摂理を感ずる、ということでしょう。

そして彼らはベニヤミンもつれて、エジプトに行きました。ヨセフは、家の管理者に歓待するよう指示し、食事をともにすることを言います。兄たちはいぶかしげに思います。そして家の管理者に、釈明的なことを言いますが、この管理者は「安心しなさい。あなた方の父の神がなされたことだ」と言います。そしてエジプトに監禁されていたシメオンを解放します。そしていよいよヨセフの家に連れて行き、ヨセフとの謁見の場をセットします。ヨセフは父親のことなど親しげにきいたあとベニヤミンを見て「わが子よ。神があなたを恵まれるように」と言います。これはイスラエル民族における祝祷のことばです。ヨセフは別室で泣いたのち戻ってきて、食事の用意をさせます。その時、年齢順に席次を指図したので、兄たちは驚きました。ベニヤミンの皿には他の者の五倍の分であった、と記されています。これは末の子だからということもあるでしょうが、懐かしさがこみ上げてきた結果でしょう。ヨセフにとっての唯一の弟ということもあったでしょう。

ヨセフはここでトリッキーなことをします。皆に代金を返すのに加えベニヤミンに対してだけは彼の袋に銀の杯をいれろ、と指示します。そして彼らがカナンの地に向かって旅立ったところで、ヨセフは家の管理者を送って、「なぜ、あなたがたは悪を持って善に報いるのか」と言わせます。銀の杯を盗んだ人間がいる、ことを指摘しているのです。兄たちは44:9で「しもべどものうちのだれからでも、それが見つかった者は殺してください。そして私たちもまた、ご主人の奴隷となりましょう。」と言っています。しかし、ベニヤミンの袋から「銀の杯」がみつかります。彼らは、引き返して、ヨセフの前にでました。ヨセフは「あなたがたのしたこのしわざは、何だ。私のような者はまじないをするということを知らなかったのか。」と言います。ここでユダが言ったことが大変です。44:16です。「私たちはあなたさまに何を申せましょう。何の申し開きができましょう。また何と言って弁解することができましょう。神がしもべどもの咎をあばかれたのです。今このとおり、私たちも、そして杯を持っているのを見つかった者も、あなたさまの奴隷となりましょう。」 と言います。これは、この出来事を通して彼らが過去に犯した、ヨセフを売ったと言う咎を暴いたのだ、と理解したのです。ヨセフはベニヤミンだけ置いて行けばよい、と言いますが、ユダは父がいかにベニヤミンを愛しているか、を繰り返し述べ、自らが命を懸けてベニヤミンの帰還を保証していることものべ、ベニヤミンなしで父のもとに帰ることはできない旨を言います。ここでユダは銀の杯は自分たちの身に覚えのない事であるという釈明を一切言っていません。それは、過去の彼らの罪を明らかにするために、神がこの事件を利用した、と理解した、ということです。これも神の摂理の現れ方の一つです。それにしてもヨセフのやり方はトリッキーすぎます。なにか罠にはめてやる、というようなやり方が続いています。常識的には「やりすぎ」です。しかし、このような罪あるやり方も、神の許容範囲である、ということはこれも神の摂理の範囲である、ということなのでしょう。これらのことをもっと広げて歴史の出来事にまで拡大すると、ことの重大さがみえてきます。大いなる罪により大量の命を奪われることを通して神の摂理が具体化する、ということです。

とうとうヨセフは感情を抑えられず、兄たちに自分はヨセフであることを告白します。ユダが彼らの過去の罪を告白したため、ヨハネ自身の過去の兄たちに対する高慢さも含め、告白しなければならない、という衝動にかられたのです。これは自らの罪も認めた態度だと思います。人間は他人から責められることによって心からの告白をすることはありません。他者の告白は、自分の罪の赦しを意味している、と思うゆえに、自らの罪の告白に導かれるのです。そして、ヨセフは自分が売られたことを、45:7で「それで神は私をあなたがたより先にお遣わしになりました。それは、あなたがたのために残りの者をこの地に残し、また、大いなる救いによってあなたがたを生きながらえさせるためだったのです。」と理解するに至っていることを述べています。「残りの者」というのはエレミヤ書でも示されている言葉ですが、イスラエルの裔のことです。エジプトの地にヨセフが売られてきたのは飢饉のような時にイスラエルの裔を生きながらえさせるための神の導き、摂理であったのだ、ということです。そのために、ヨセフを助け、イスラエルの裔がゴシェンの地で生きていくことが出来るようにした、のは神である、という理解です。

この兄弟の再会と父がカナンの地で待っていることはパロに報告されました。パロはヤコブの一族皆でエジプトに来なさい、と言います。そしてパロは「子どもたちと妻たちのために、エジプトの地から車を持って行き、あなたがたの父を乗せて来なさい。」と命ずることをヨセフに言います。子供たちや妻たち、そして父ヤコブが歩く必要のないようにしてあげまさい、という意味であり、エジプトの国としての客人の受け入れ、ということになります。ヨセフは兄弟たちに「途中で言い争わないでください」と言って送り出しました。ヨセフのこの言葉をもってヨセフは兄たちに不安感を持っていたことの現れ、という解釈をする説があります。この解釈はおかしい、と思います。この部分のヘブル語は「ra:gaz」ですが「言い争う」という強い意味で使われているのは稀で、多くは英語のtrembleという意味で「気をもむ、心配する、心配になる」程度の意味です。「心配しないように」という言葉で、兄たち、ひいては父に安心感を与えようとした、と考えられると思います。

そして父ヤコブは最初は信じられない、という態度でしたが、送られた車をみると元気になり、エジプトに行くつもりになりました。

カナンを出発し、ベエルシェバでヤコブは幻をみました。神がヤコブに呼びかけた時ヤコブは「ここにいます」と答えました。この答え方は、預言者サムエルの言葉でもあります。預言者が神の声に応答する時の表現です。ヤコブは預言者の列に加えられることを意味している、と言えます。そして神の声は「わたし自身があなたといっしょにエジプトに下り、また、わたし自身が必ずあなたを再び導き上る。」と言っています。再びカナンの地に戻る、と言われているのです。これは出エジプトを預言したと解する必要はありません。カナンの地は神がアブラハムに約束された地ですので、いずれ、ここに戻って来るのは当然と考えられていた、と解釈できるでしょう。そしてヤコブ一族はこぞってエジプトに移ったのです。このあとに聖書はヤコブ一族、イスラエルの民について記しています。そしてゴシェンの地でヨセフ、ヤコブの再会となります。ここでヨセフは皆に忠告をします。パロが「あなたたちの職業はなにか」と聞かれたら「家畜を飼う者」と答えてくれと言ってその理由としてエジプトでは羊を飼う者は忌み嫌われているから、と言っています。これは農耕民族が遊牧民族に嫌悪感を持って居ることの反映、とみられます。住所の定まらぬ放浪の民ということです。これはカナンの地の人々にも存在した感情と考えられ、主イエスの御降誕の時の羊飼いの低い地位を想定すれば理解できるところです。

ヨセフはことの次第をパロに報告します。兄弟五人を連れて行きました。ゴシェンの地に寄留させてくれるよう頼みました。すべて順調にいきました。ヨセフはゴシェンの地に住まわせた上、ラメセスの地を所有として与えた、と記されています。これは重大です。ラメセスは後の新王国時代のエジプトの首都であり、「アビル」というヘブル人の別名である人々を奴隷として使って作った町、とされているからです。ヒクソスの首都アバリスの近くです。エジプト第19王朝のラメセスII世の名はこの町の名に由来しています。出エジプトの出発点となった町もこのラメセスです。ラメセスというのは「太陽神ラーの生んだ子」という意味ですから新王国になってからの名前です。するとここでは、ゴシェンの地にあり、後にエジプトの首都となる土地はイスラエルの民に与えられた土地である、と主張していることになります。

飢饉が更に激しくなったためエジプトの人々はヨセフより穀物を得るために銀をはらいました。銀が尽きても飢饉はおさまりません。そのため今度は家畜と引き換えに食料をヨセフから得ます。それでも飢饉は終りません。次は自分のからだと農地を差し替えに食料をもらう、ことになりました。そしてエジプトの民はパロの奴隷となりました。そして植える種を乞うたのです。ヨセフはエジプトの民を領土の端から端まで町々に移動した、とあります。これは大規模な農地改革を行ったことを意味していると思われます。ギリシャ語訳では「奴隷とした」となっています。しかし、祭司たちの土地は買い取らなかった、と言われています。土地をすべてパロのもの即ち国有とし、計画的生産体制を確立するために人口移動をさせ、種を配ったのだろう、と想像されます。ここに至る過程をみると中小農耕者が没落し、パロによる絶対王権が確立して行く過程のように見受けられます。これが新王国時代の唯一太陽神ラーとその代理人である王パロという政治体制に結びつきます。

しかし、配分は1/5をパロに、という訳ですから税負担という見地から見れば当時としては軽いと考えられます。おそらく収穫高の大幅増加があったのだろうと思われます。イスラエルの民もゴシェンの地で反映しました。ヤコブはエジプトの地で既に17年になり最後に当たって、ヨセフに自分を先祖の地に葬るよう約束してもらいました。アブラハム以来の伝統である、ももの下に手を入れる形で誓いました。先祖たちの墓はアブラハムがサラのために買ったマクベラのほら穴です。ヘブロン地区のマムレの東にあります。ヤコブの最後に際し、ヨセフはマナセとエフライムも連れて行きました。ヤコブはそこで神よりの祝福の約束があった旨の話をし、自分がエジプトに来る前のヨセフの子ども二人を自分の直接の子とするとします。そしてこの二人を祝福します。そして子供たちと共にヨセフを祝福します。これはヨセフを正式な後継者としたものと解釈してよさそうです。そして、シェケムをヨセフに与えました。ヨセフはここに葬られることになります。

49章はヤコブの子に対する祝福と預言です。その最後に、ヤコブはマクベラの洞穴にはアブラハム、その妻サラ、イサク、その妻リベカそしてヤコブの妻レアが葬られていることが述べられます。ヤコブの生涯は147才でした。イサク180才、アブラハム175才ですから、先祖に比してみれば若干短かったといえます。しかし、子供の数は最高です。ちなみにヤコブのもう一人の正妻ラケルはヤコブとともにパレスチナに帰る途中ベニヤミンを生んで死にベツレヘムの近くに葬られました。ヤコブは石の柱を立てた、とされています。ヨセフの母親はラケルです。主イエスの生まれたのはベツレヘムですが、ヨセフの母の葬られた地というのは何らかのつながりがあるのかもしれません。むしろ母マリアの系譜に関連しているのかもしれません。

ヨセフは父ヤコブをエジプトの慣習に従いミイラにするよう命じました。そしてエジプトは70日間喪に服したとされています。そしてヨセフは父を葬るのにカナンの地に行かせてほしい旨パロに願い出て認められます。ヨセフたち一同はゴレン・ハアダテという地でエジプト式の大葬儀を行いました。そしてマクベラのほら穴に葬り、エジプトに帰りました。そして本日の聖書箇所になります。ヨセフの兄弟たちはいまだ釈然とした気持ちになっていませんでした。50:15で、「ヨセフの兄弟たちが、彼らの父が死んだのを見たとき、彼らは、「ヨセフはわれわれを恨んで、われわれが彼に犯したすべての悪の仕返しをするかもしれない」と言った。」とあります。このため、彼らはヨセフに対し、自分たちを赦してくれるよう願うとともに「私たちはあなたの奴隷です」と申し出ます。この話の流れはヨセフが自分はヨセフであると告白するまでのストーリー、言い方と近似しています。44章から45章にかけてです。この申し出に対し、ヨセフは50:20「あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのよう

にして、多くの人々を生かしておくためでした。」と答えます。罪の絡まり合いのなかで作られる歴史の底流にそれは神の恵みの摂理が横たわっている、というのです。このように、歴史の事象をみることが出来れば、ある意味で神の視座を得ることになりますが、人間はそこにいたることは出来ず、日々の生活、個々の歴史のはざまで呻吟しているのが現実です。そして、ヨセフも最後の時をむかえます。110才です。ヨセフは神がカナンへの帰還の希望を叶えてくださるという信仰告白を致します。ヨセフはエジプトでミイラにされ、棺に納められた、と言われています。最後までエジプト人としての扱いでした。

　以上のヨセフの生涯は、神の摂理というのはどのように現実のものとなって行くのかを考えさせます。きれいごととしてではなく、一見すると罪のからみあい、のようなところで摂理が現実化していく、ということです。従って、望みを捨てる必要もありませんが、かといってすいすいことが進むようなことでもありません。人間の歴史にこれをあえてあてはめると、戦争の歴史と神の摂理の関係が似た関係にあるように思えてなりません。人間の罪の極致とも言うべき戦争を通して最終的にはイザヤが示した、戦争が全くなくなる世界への摂理が現実のものになって行く、ということです。その歴史のなかで「戦争は放棄する。その保証として戦争の手段はもたない」とした孤高の民の宣言は神の摂理の道しるべ、である、と思う次第です。祈ります。

　（ご在天の父なる御神様、今日はヨセフの生涯から、摂理の不可思議さを学びました。神様は、罪の縄目を通しても摂理をお示しになられます。我々は神の摂理が奈辺にあるのかを見出すことができず、右往左往しているのが現実です。主なる神は私たちを試みることもあります。重大な警告を与えられることもあります。どうぞそれらの下で耐え抜く力をお与えください。主の約束に希望を置き、神の国の証人として、この世を歩むものとさせてください。願わくは、試みに合わせないでください。神の警告を知る知恵をお与えください。私自身、家族、教会、そして社会のいろいろな群れが主の導きの下で歩みますよう、力をお与えください。われらの救い主イエス・キリストの名によって祈ります。アーメン）